
(習作) 宝箱転生記～ミミックの生態～

インテグラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（習作） 宝箱転生記〜ミミックの生態〜

【Nコード】

N9359Z

【作者名】

インテグラル

【あらすじ】

生前、病気によって不幸な死を遂げた彼が次に目を覚ますと、そこは見知らぬ暗闇の石室だった…。誰もが知っているがあまり人気では無さそうなアイツに転生した彼は、これからどうやって生きていくのか。これは、チキンな彼の宝箱転生記である。

初投稿の習作ですので、見苦しい文章になる可能性が高いです。更新速度も期待しないでいただきたいのですが…。それでも良いという方の暇つぶしにでもなれば幸いです。

カドのある人生、始めました。（前書き）

初めまして、インテグラルと申します。

今回は、練習作品として初投稿させていただきます。

作者の文才はミジンコのうえ、更新速度もゾウリムシだと思われるますが、それでも構わないという心優しい方の暇つぶしにでもなるといいな〜と思っています。

カドのある人生、始めました。

「彼」の意識は唐突に覚醒した。

(……ん、あれ…俺は…?)

ぼんやりとしたまま辺りを探る「彼」。

(確か、俺は病院のあのベッドの上で死んで……)

未だしつかりとした思考を構築出来ない「彼」は、ふわふわとした思考回路で自分の身の上を確認する。

「彼」には直前の死の記憶があつた。

特別幸運でも不運でも無かつたはずの青年だつた。

ごく普通に生まれ、育ち、不運なことにとある致死の病に倒れてしまふ。

一般的に見れば不幸な人生だつたかもしれない。

しかし、「彼」はそこまで自分の人生と運を恨む事も無かつた。

そうなり得る可能性があればもつと生きたいとは思つただらう。

だが、そうはならなかつた今においても大した後悔はない。

彼のその人生観は、何事にも淡泊だつた彼の人格をよく表している。

（ここはどこだろう…？）

見知らぬ場所だった。

辺りは真っ暗であり、床が比較的平らな石で出来ていることから何らかの室内と考えられる。

部屋の奥にはアーチ状にくり抜かれた入り口がある。

（何でこんな場所にいるんだ？ いや、それよりもなぜ一度途切れた意識が続いている？）

ちなみに、「彼」は死後の世界等の存在を一切信じていない。

そのような話が嫌いなわけではないが、まあ無いだろうな～というのが生前の「彼」の死に対する観念であった。

（おかしいぞ？ なんだこの状況は？）

時間が経つに連れて思考ははつきりとし始め、今の異常な事態が理解出来るようになってくる。

（俺は死んだ。…それは間違い無いよな？ 流石に。）

（でも、意識がある。）

だんだんと不安になってきた「彼」は、とりあえず周りの状況をもっとよく確かめてみることにする。

辺りが真っ暗なため、よくよく目を凝らし…

（あれ？）

目を凝らす？

今更ながらに自身の身体に起こった変化に気づく「彼」。

（こんな真っ暗な部屋で物を「見た」？）

それも、かつてとは比べ物にならないくらい詳細で鮮明で正確に。

少し意識を広げれば、自身の周囲360度が視界に入った。

辺りには一切の光源が無いにも関わらず物が「見え」、知覚できる。

明らかに異常だった。

そこで、「彼」はようやく自覚する。

（あれ？今の「俺」は人間なのか？）

自分の「手」を眼前…いや、全方位が眼前とも言えるのだがとにかく持ち上げてみる。

目に映ったのは、くねくねと自在に動く二本の触手。

（……は？）

「彼」は、自分の目で見たものが信じられず、反射的に目をこすろ

うとした。

(……………。)

触手が近づいて来て、左右に頼り無く揺れる。

(…は？え？何これ？)

今度は、自分の身体を手（触手）で触ってみようとしたのだが……

(え、硬った！？何だよこれ、木製？)

「彼」の感覚的に自分の身体があるはずの場所に鎮座していたのは木の箱だった。

上面が引き上げ蓋になっていて、今動かしている触手もその隙間から伸びている……ようだ。

とりあえず、「彼」は自分の身体をペタペタと触りまくる。

(いやいや、身体が箱（木製）っておかしいだろ生物として。)

しかし、調べれば調べるほど箱である。

縦60cm、横80cm、高さ70cmくらいのなかなか大きくて立派な木箱のようだ。

表面からは木目の感触がある。

(はぁ……。いくら確かめても箱は無くないよな。それじゃあ、

中を調べてみるか。)

「彼」の意志に従い、触手が箱の蓋付近…つまり触手自体の根本でもあるわけだが、その隙間に近づいていく。

スルリと隙間から侵入した触手は、箱の内側を探り、そして大きすぎる違和感にピタリと動きを止めた。

箱は、慎重に伸ばされた触手をほぼ全て飲み込んだ。

深さ70cm程度の箱が、長さ1m程の触手をやすやすと受け入れたのだ。

触手を伸ばしたままで。

(!?!?!?! おかしい、箱の深さは触手の長さより小さかったはず。)

だが、現実には箱の中はいくら触手を振り回しても壁に当たる気配はなく、それどころかどこまでも続いていそうな得体の知れない巨大さを感じさせた。

(この中…いや、今は俺の中、か。とにかく、まともな空間ではないな。明らかに何か異常な空間につながっている気がする。)

(ん?!?!?! まてよ、何かこんな化け物がいた気がするな。箱の身体…触手…異空間につながる入り口…。)

(箱の中に隠れていて、触手で他の生物を捕まえ、口を開ければ無限の胃袋…って、あ。)

（まさか、アレか？…いやいやそれは無いだろ。）

（いくら何でも…まさか、なあ。）

（でも、今のところ手に入った情報が当てはまる生物が一つしか思い浮かばないんだよなあ？）

そこまで考えた「彼」は、ふと思考の海から抜け出すと、相変わらず静かな闇が埋め尽くす眼前に向かってそつと呟いた。

（…やはり、ミミック、か。）

ミミックに発声器官はありません。

呟いたつもり、というのが正確です。

こうして、「彼」の新たな宝箱人生…いや、初めての箱生が始まったのだった。

#####

始まったのだったが。

（まいったな…ミミックの生態なんて想像も出来ないんだが。）

なにせ、宝箱の中から触手が生えているだけの謎生物である。

普段何をしているのか、とか、主に何を食べているのか、とか、疑問は尽きない。

…ミミックって、あらゆる生物の中で一番生態が謎な生物なんじゃないだろうか。

そんな事を考えていた彼だったが、とりあえず移動する事にした。

何事も、自分で動いて情報を集めるのが「彼」の主義だった。

立ち上がろうとして…

（あれ？ミミックって、足無いよな。）

……………。

（え、嘘、まさかの移動不可能！？）

と、ここで「彼」は外見上唯一自分とただの宝箱を区別する存在に気づく。

（そ、そうだ、触手があるじゃないか。）

触手を先の方の地面に押し付け、身体兼宝箱を引きずろうとして、「彼」は愕然とした。

（この触手…意外と非力だ…………。）

ずりずりと人であった頃の歩みよりだいぶ遅い速度で身体が進む。

もともと一定個所に止まって農をはる（というイメージの）生物であるためか、移動能力はやたらと低いらしい。

ズリズリ…

ズリズリ…

ズリズリ…

ズリズリ…

ズリ…

…

…

（おっそー！！）

驚愕の鈍足だった。

（え、何、俺はこれからこのスピードで生きていかなあかんの！？）

思わず関西弁になるくらいのショックだったようだ。

その時だった。

ウゝゝオゝゝゝ。

妙な声が聞こえた。

人間の呻きのような、それにしては音程が低すぎる奇妙で不気味な重音。

「彼」…以後ミミック…は、その奇妙な音にピタリと動きを止めた。恐る恐る辺りをうかがう。

（何かいるのか？）

五感を全開にして情報を拾おうとする。

そして…

（これは…足音？）

微かに足音らしき音を捉えた。

少々乱れ気味ではあるが、二足歩行をしているような気がする。

だんだん近づいてくる。

（マズいマズいマズい！もう近くにいます。）

アーチ状の部屋の入り口まで到達していたミミックは、全速力で部屋の奥に逃げ戻ろうとするが…

（ギャー！全然進まないー！！）

足音はゆっくりと近づいて来る。

(…も、もち着け…じゃない落ち着け、俺。あの足音が何も敵とは限らないだろ、道に迷って困ってる美少女かも知れない。)

既に、足音ははっきりと聞こえるようになっていた。

ビタツ…ズルルツ…ビタンツ！…ベタツ…

(…そ、そうとも。きっと可愛い女の子さ！…ちょっと千鳥足だけど。)

ビタツ！ズルツ…ベタンツ！

(ギャー！やっぱ怖い！俺も化け物だけどホントに怖い！…ってあ、ミミックじゃん、俺。)

ミミックは、触手を箱にしまつと蓋を閉じ、「僕、ただの箱だよ？」形態に移行した。

専門なだけあり、その姿はどこから見てもただの箱、ちょっと古ぼけた木箱が打ち捨てられているようにしか見えない。

(よ、よし。これで安全だろう。)

とりあえずやれることをやったミミックは、足音に意識を集中する。

謎の足音は、もうすぐそこだった。

ビタツ…ズルツ…ベタ…ビタツ…ビタツ…

(……………。)

ズルッ…………ベタ…ビタッ…………ビタッ…………ビタッ…………

(……………ブルッ。)

ビタッ…………ビタッ…………ベタ…ベタ…ビタッ…………

足音は、ついにミミックのいる石室の入り口に達した。

(来るな来るな来るな来るなぁー！)

ミミックの祈りも虚しく、足音の主はゆっくりと顔を覗かせる。

それは……

流れる金髪。

真っ白な肌。

抜群のプロポーション。

(美少女だったー！……これは、タイプだったかもしれないな。)

白目をむいて、腹から腸を引きずってなければだが。

左手もとれそうだし。

口元には派手な血化粧が。

（どう見てもゾンビです本当にありがとうございました。）

「ウゝゝゝオゝ？」

（こっちに興味持ったあー！！）

ふらふらと近づいて来るゾンビ（多分）。

（怖えー！何このリアルバイ ハザード！？）

主人公が箱のバイ ハザードなんて聞いたこと無いけど。

ついに目の前に立つたゾンビ（確定）。

腐り始めた両手が箱にかけられ…

（え？ちよっ…なんで開けようとしてんの！？ゾンビにそんな知恵があるわけ…ちよっ、やめ、開けないでー！）

開けられた。

だが、それだけだった。

蓋を開けたゾンビは、そのまま立ち尽くし箱の中に虚ろな視線を落とすのみである。

（もしかして、ゾンビはミミックは襲わないのか？）

あり得る話ではある。

ミミックを襲ったゾンビが得るものなんて木片くらいだと思われる事であるし。

勇気が出たミミックは、ゾンビの目の前で触手を振ってみた。

フリフリ。

（何の反応も無いな。）

と。

突然ゾンビが触手を捕まえると、口をあぐり開いてその中へ…

（ってさせるかー！！）

慌てたミミックは、触手を箱の中にしまった。

…しっかりと触手を握り締めたゾンビごと。

ミミックの箱の中に広がる不思議空間は、明らかに自分より大きいゾンビをやすやすと飲み込んでしまった。

（…あれ、え？）

（ぞ、ゾンビ食っちゃったー！？）

…前途多難であった。

腹…壊さないよね…？」

「ヴ~~~~ア~~~~」

暗闇に包まれた石の通路をふらふらとさまようモノがあった。

腐りかけの身体を重そうに引きずって歩く、生き続ける死者。

「リビングデッド」と呼ばれるモンスターだ。

世界に満ちる神秘のエネルギーである「魔素」、その密度が高い場所に放置された死体は、魔力にあてられ仮初めの命を取り戻す。

「ウ~~~~」

危なっかしい足取りで石の冷たい通路を進むリビングデッド。

ふと、リビングデッドは何かを見つけたようだ。

さっきまでのたださ迷うだけの足取りと違い、明確にどこかを目標として足を進め始めた。

…それでもやっぱりふらはしているのだが。

とにかく、何か興味を引く物を発見したらしいリビングデッドは、あっちへふらふらこっちへふらふら通路を進む。

目指した先には、木箱が一つ鎮座していた。

50メートルを30秒もかけて箱にたどり着いたりビンゲデッドは、見たところただの木箱であるそれに興味津々で顔を寄せた。

すると……

ガバツ！

シュルルル

グイッ

ボタン！

……。

あっと言う間の早業だった。

変化は一瞬、次の瞬間には先程までとなんら変わらぬ静かな世界が広がっていた。

さっきまでいたりビンゲデッドの姿が無い事を除いて、だ。

木箱は、ひとりでに蓋を開けたとおもつと一瞬の早業でリビンゲデッドを触手に巻き取り、箱の中へ引きずり込んでしまったのだった。

……この、どう見てもホラー映画の化け物役みたいのがこの物語の主人公である。

（？何か悪口言われたような……。）

気のせいです。

とにかく、「彼」がミミックに生まれ変わってから3ヶ月が経過していた。

もともとの人間であつた「彼」がこんな空間に3ヶ月もいたら発狂していたろうが、今の「彼」はミミックである。

むしろ、暗くて狭い場所は好きであつたりした。

この3ヶ月、ミミックは積極的に獲物（大体リビングデッド。）を捕食？している。

当然、理由がある。

（今ので10匹は食べた。そろそろか…？）

突然、空間に半透明に輝く文字が浮かんた。

！Congratulations！！

！リビングデッドLv5（11）の吸収でレベルが上がりました。
スキルレベルが上がりました。！

！ミミックロードLv18 Lv19！

！スキル「誘引」Lv5 Lv6！

これである。

ミミックは、というより全てのモンスターなのだろうが、他のモンスターを殺すと何らかの力が蓄積され、一定値貯まるとレベルアップの通知があるのだ。

ゲームみたいな不思議なシステムであるが、特に害もないためそういう物なのだとミミックは納得していた。

一つくらいではわかり辛いが、三つもレベルが上がると確かに自分の違いがはつきりとわかる。

以前よりも触手の力が増し、周りの知覚範囲も格段に広がった。

…それでもやっぱり鈍足ではあるが、こればかりは仕方がない事だろう。

いくらレベルが上昇しても、本来自分が得意としていない事はやっぱり得意では無いのだった。

そもそもミミックの身体構造的に考えても、獲物の近くまで行ったら後は騙しておびき寄せてひと呑みのほうが効率がいいこともあるし。

（いやー、しかもうレベル19か。最初はただのミミックLv1で焦ったよな。）

今のミミックは、レベル12で進化してミミックロードである。

…長いので呼び方はミミックのままとさせていただきます。

（しかし…ミミックロードに進化しても外見上変化がほとんど無くて悲しいよなあ）

箱がちよっぴり立派になりました。

余談ではあるが、この世界においてミミックというモンスターがミミックロードに到達する事は稀である。

自分からアピールしない限りモンスターがミミックに気づく事は少なく、通常のミミックは移動するという考えを持たない。

よって、普通ミミックといえば運が良くてもレベルが1上がるのに数十年の月日を必要とするのだ。

大抵のミミックは、レベル10になる前に格上のモンスターに破壊されてしまうのだが。

ただし、生きているモンスターを丸呑みにするという攻撃は、相手の力を全て吸収するという利点があるために獲物さえ豊富ならば凄まじい勢いで成長する可能性も秘めている。

そして、現在の「彼」ことミミックがその状態なのだった。

（あゝ、ようやくレベル19か。まだまだ先は長いなあ。）

既にミミック系モンスターとしては規格外のレベルに達しつつある

ミミックだが、まだまだ上に行くつもりである。

（さて、次の獲物を探すか）

そうしてミミックは、ズルズルと亀の歩みで闇の奥に消えてゆくのであった。

／／／／

ドーーーーーン！！！！

（！？）

ある日のこと、いつも通りにリビングデッドを捕まえていたミミックは、とてつもない衝撃を感知した。

何かが壁に叩きつけられたような鈍い打撃音と巨大な衝撃に辺りがぐらぐらと揺れる。

（何だ！？こんな事初めてだぞ！？）

今までミミックが出会ったのはリビングデッドと他のミミックだけである。

（意外と近いな…よし、こっそり見に行こう。）

ミミックは、ズルズルと移動を開始した。

相変わらず移動に関しては役立たずの触手を使い、暗い通路をノロノロと進む。

ドタバタギャーギャー大音響を響かせている原因の場所は既に目星をつけている。

ドォーーーーーン!!!!!!

再び辺りが大きく揺れた。

何が起こっているのやら…。

ミミックが現場に到着したとき、ちょうど決着が着く瞬間だった。

初めて見る巨大なドラゴンと、いかにも禍々しい気配を纏った鎧の騎士が戦っていたのだ。

この石造りの迷宮は、基本的には狭い通路と石室で構成されているが、今眼前に広がる空間だけはやたらと広いホールになっていた。

勿論、ミミックも既に訪れたことはあったが、ただ広いだけであり、獲物がなかなか自分に気づかないというデメリットしか無かったため一度来たきりだったのだ。

全長7、8メートルはあるだろうダークレッドのドラゴンと、禍々しい黒い鎧の騎士、戦いは騎士の劣勢だった。

騎士は、手に持つ明らかに呪われている感じの剣を振るいドラゴンに浅く無い傷を刻みつけていくが、ドラゴンはその巨体を武器に騎士を吹き飛ばし叩きつけ蹂躪する。

ギヤオオオオッー！ー！ー！！

ドラゴンの鳴き声と共にミミックの目の前で黒騎士が壁に叩きつけられた。

ドラゴンの方も軽くないダメージのようで、足がふらついているが、黒騎士は既に立つことも厳しいようだ。

ガシャガシャと鎧を鳴らすのが立ち上がる気配は無い。

やがてその動きも緩慢になると、僅かに剣を持ち上げてドラゴンに向けたまま動かなくなった。

さっきまでの騒音から、一転して静まり返る場。

黒騎士はドラゴンに剣を向けたまま静止し、ドラゴンはフラフラながら黒騎士を睨み付けて臨戦態勢、ミミックはビビりながら箱の中に閉じこもった。

緊張が高まり、爆発するかに思われたその時…

ドラゴンがくるりと背を向けた。

小さく鳴くと奥の暗闇に消えてゆく

ドラゴンの後ろ姿が完全に消えると、黒騎士はガシヤリと剣を下ろした。

そうとう消耗しているようで、もう動く事が出来ないようだ。

黒騎士に興味を持ったミニックは、そろそろと近づいてみる。

5メートル

4メートル

3メートル

2メートル

1メートル

（ここまで約5分経過。遅い。）

至近距離で黒騎士の顔の部分を覗き込む。

（？中が無い？）

倒れてなお禍々しい気配を放つ鎧の中身は空のようだ。

（そういうモンスターなのか？…まあ、ミニックがいるんだし空の鎧がいても不思議じゃないよな。）

そんなことを思いながら黒騎士を触手でつついてみようとした瞬間…

ガシャ！！

（ギャー！！）

突如として黒騎士が再稼働し、ミニツクの触手を握り締めたのだ。

ミニツクは必死に触手を引っ張るが、弱っているとはいえドラゴンと1対1が出来るような超高レベルモンスターと勝負になるはずもなく。

（ギャー！離せー！）

全力で触手を引っ張り続ける。

だが、相手は微動だにせず、むしろミニツクがだんだん黒騎士に引き寄せられていた。

そしてついに……

ミニツクを鬱陶しく思ったのが、黒騎士は握り締めたミニツクの触手を凄まじい力で引いた。

その力に抗しきれぬわけもないミニツクは宙を舞う。

ふわりと浮いたミニツクは、勢い良く黒騎士に引きずり寄せられ、そのまま叩きつけられ……

直前に大きく箱の口を開いた。

それが本能的な行動なのか、悲鳴でもあげようとしたのかは定かでない。

が、結果的にとんでもない事が起こった。

大きく開いたミミックの口は、黒騎士の頭部にかぶさり……そのまま呑み込んだ。

少し遅れて全身が呑み込まれていく。

数秒後には、ミミックだけが残っていた。

（え？嘘？……く、食っちまったー！？）

（相手の方が大分レベル高かったはずだけど大丈夫だよな？突然口から手が出てきたりしないよな！？）

ー Congratulations！ー

ー ナイトメア・ナイトアーマーLv89（1）の吸収でレベルが上がりました。ー

ー ミミックロードLv19 ミミックロードLv62ー

ー Lv28に達したため、進化が可能です。ー

ー 進化がキャンセルされました。ー

ーLv40に達したため、進化が可能です。ー

ー進化がキャンセルされました。ー

ーLv62に達したため、進化が可能です。ー

ー進化系統を選択してください。ー

ーパンドラLv62

選択条件 レベル62に到達。

ーリベリオンボックスLv62

選択条件 レベル62に到達。

自分より10以上高いレベルのモンスターを倒す。

ースローターボックスLv62

選択条件 レベル62に到達。

自分より30以上高いレベルのモンスターを倒す。
一度以上進化をキャンセルする。

ーPlease Select?ー

腹…壊さないよね…？（後書き）

ちよつと急ぎ足ですが、話が進みます。

…早く本編に入りたいなあ。

ご意見、ご感想等お待ちしております。

習作なので、色々な意見をいただきながらより良くなっていきたいと思います。

喚ばれしモノ（前書き）

とりあえず、この話でプロローグ的な部分が終了します。

地下迷宮での成り上がりモンスターライフを期待していた読者の方はごめんなさい。

尚、今話から多大な厨二成分を含みます。

喚ばれしモノ

結局、ミミックは進化しなかった。

進化の選択条件の中に「進化を〱回キャンセルする。」というものがあつたということは、おそらくキャンセルし続けることで選択肢が増えるだろう…と、いうのはまあ建て前であり。

（単純に怖かつたんだよなあ…自分が別の存在になるっていうのが。）

（ミミックロードになった時は、ミミックと大して変わらないし…そもそもあの時は訳も分からずいつの間にかロードがついてたし。）

（まったく…ゾン、いやリビングデッドを喰い漁ったり呪われてそんな鎧を取り込んだり、やることはどんどん人外に馴染んでるのにこんな所で人間時代の感情が足を引っ張るとはな。）

まあ、いまさら何を考えても仕方が無いのだろう。

ミミック本人（本箱？）は後悔していない事だし。

それより今、彼が考えるべき事は…

―ナイトメア・ナイトアーマーを吸収したことで属性《炎》、特殊属性《闇》を取得しました。―

―エクストラスキル《劫火》を取得しました。エクストラスキル《常闇》を取得しました。―

―《炎》系統の魔術が使用可能になりました。《闇》系統の魔術が使用可能になりました。―

（っていわれてもなあ。）

文字の上で表示されても全く実感が湧かないようである。

（…まあ、使えるってんだから使ってみるか。）

（それじゃ早速…どうやって使うんだろ。）

―使用魔術を選択します。―

（うおっ！？）

―属性を選択してください。―

（えー？…んじゃあ、炎？）

ー希望する現象を想像してください。ー

（現象？…あー、何かこう、火の玉とかで良いよ。）

ーイメージ操作を受信しました。《炎》フレイム・キャノン系統魔術を発動します。ー

（え？いや、キャノンとかじゃなくてもっと小規模なファイアボ－ル的な…）

次の瞬間

ミミックは、自分の意志では無く自動で大きく口（蓋？）を開いた。

その中に、紅く輝く光の粒子が集い、大きな玉を作り出す。

急速に成長した炎球の大きさは直径約１メートル、炎球の撒き散らす高温のためにミミックの周囲はゆらゆらとした陽炎に巻かれている。

（うそー！っ！？え、ちよつ、ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！）

ミミック本体には全く熱が来ないが、彼があくまで「試し」で発動させてみた魔術はとんでもなく「ヤバい」代物だったようだ。

そして。

最終的に約2メートルまで成長した炎球は、発動させた本体の意志と裏腹に射出された。

辺りの暗闇を切り裂いて飛ぶ炎球。

暗闇の世界は一瞬だけ真昼のように照らされ。

一拍置いて、凄まじい爆音が世界に響き渡ったのだった。

／／／／／

(……ウソだろ………?)

《フレイム・キャノン》を誤射(と、いつでも良かるう。)したミミックは、すぐさま着弾点に向かった。

もちろん、ミミック基準のすぐさまであり、周りから見ればじれったい速度であったが。

自らの放った魔術が残した痕跡は、彼を絶句させるに余りある物だった。

頑丈だったはずの石の壁はクレーターのごとく削り取られており、周辺に広がるヒビまで入れると10メートルはあろうかという巨大な破壊痕。

（…とりあえず、しばらくは魔術の練習だな。）

（そもそも、今の俺の力ってどんなもんなだろうなあ？）

ミミックは、ふと先程のドラゴンを思い出した。

（そういえばさっきのドラゴン…あっちに行ったよな。何かあるのか？）

ドラゴンが去って行ったこの広場の奥は、ミミックが一度も足を踏み入れたことのないエリアだ。

（…行ってみよう。）

ミミックは、ドラゴンが消えた広場の奥に触手を向けたのだった。

／／／／／

ミミックが黒騎士を取り込んでよくわからん事になってからちょうど半年。

現在ミミックは修羅場の真っ最中だった。

相変わらずの暗い迷宮（ミミック命名）の広場で、全身を白い鱗に包んだ全長約2メートルのドラゴンが暴れまわる。

相対するは高さ70センチの箱。

箱が沈黙したまま静かに触手を構えているのに対し、白いドラゴンは盛んに箱を威嚇する。

（…ふん、弱い犬ほどよく吠えるってね。）

箱：ミミックが触手を振り上げて見せると、白いドラゴンは瞬時に反応した。

翼を使った大きなバックステップをしながら炎を吐き出す。

放たれた炎は小さなミミックの身体を包み込もうと……

ー《ダーク・プロテクション》ー

ミミックの前に、周囲の暗闇から染み出すように現れた黒い壁が展開された。

壁に当たった炎は、まるで壁に呑み込まれたかのように消えていく。

数秒後には黒い壁も消え去り、はつきりと怯えているドラゴンと何事も無かったかのようなミミックが再び顔を合わせた。

（…仮にもドラゴンと戦ってるはずなんだがな。ミミックに勝てないドラゴンってのもシュールな光景だな。）

（ま、さっさといただきますか。）

ー《イグニス・フランクス》ー

次の瞬間、ミミックの前方から現れた灼熱の熱線が空間を灼いた。狙いを過たず身体を中心に貫かれた白いドラゴンは、致命傷を負って倒れ込む。

グオオオオツツーーーーー!!!!!!

断末魔の絶叫を響かせるドラゴン。

その体に触手が巻きつき、ドラゴンはミミックの成長の糧となったのだった。

ーホワイト・レッサードドラゴンの吸収でレベルが上がりました。ー

ーミニックロードLv70 ミミックロードLv71ー

あのダークレッドのドラゴンが消えた辺りを探索したミニックは、下の階へと続く階段を発見した。

しばらくの間はもともとの一つ下の階でそこに生息していた「小悪魔^ブ」を捕食していたのだが、いまさらインプごときを何匹吸収してもレベルアップには繋がらないと悟り下へ下へと下っていったのだ。そして見つけた理想の獲物がホワイト・レッサードドラゴンなのである。

確実に勝ててそこそこの良い餌となる獲物だ。

おかげで、ミニックのレベルは71に達した。

今現在、ミニックに勝てるモンスターは少ない。

もちろん、下へ下へと下っていけば巡り会っだろうが、ミニックはすでにレベルアップへの意欲を失いつつあった。

退屈なのである。

今は人外の身体と思考を持つミニックだが、その一方で人間としての思考も合わせ持つミニックだ。

毎日暗い迷宮でひたすら敵を捕食するだけの生活に退屈と疲労を感じていた。

（あー、暇だなー。死にたいとまでは言わないけど、何か起こらないかなー。）

その願いは、叶う。

/ / / /

深い森の中にぽつりと建った一つ的小屋。

中にいるのは一人の娘。

床に描かれた複雑を極める模様の陣に立ち、歌うように長い長い言葉紡いでいく。

古来より伝わる、契約の言葉を。

全てを失う代わりにただ一つの願いを叶えるための、禁断の唄を。

歌い、紡ぐ。

敷かれた陣は光を放ち、世界が歪み始める。

歪み始めた部屋の中、朗々とした唄だけが確かに美しく響き渡る。

― 我は願いを捧ぐ―

― 我は魂を捧ぐ―

― 我は願いを持ちし者―

― 我は汝に願う者―

― 我の全てをゆだねよう―

― 我の身体は汝の肉に―

― 我の魂は汝の力に―

― 我の願いは汝の枷に―

― 我は汝を呼びし者―

― 呼びし非礼は肉で償い―

― 請いし願いに魂を捧ごう―

― 我は願う者―

― 悲劇に報いる奇跡を待つ者―

― どうか―

―どうか―

―我はただ、汝に縋る―

陣を中心に広がった歪み。

その中心に、「彼」は喚ばれた……

喚ばれしモノ（後書き）

プロローグ最終話でした。

…いつも以上に文才の欠片もない本文に自分で絶望しています。

プロローグである転生及び成長編が終了し、次話からは召喚新生活編が始まります。

今までとはガラリと違うテイストの小説になりますが、主人公はやっぱり四角い彼なので見捨てないでいただけるとうれしいなあ…

出会い（前書き）

社怪人様、トリアグル様のアイデアを使用させていただきました。
ご意見（？）ありがとうございます。

ご意見、感想等これからもよろしく願います。

今話は短めですが、明日から一週間程更新が困難なため投下しました。

新章のプロローグとでも思っていただけだと思います。

出会い

突然の光に包まれた俺が次に見た光景は、久しぶりの人間だった。

銀色の長い髪を揺らし、紫色の瞳をこちらに向ける若い娘。

かなりの美人で目の保養に良さそうだが、その表情はあまり好意的とは言えないだろう。

…いや、現在の俺は箱に擬態中であり、ただの箱に好意的に微笑みかけるのもどうかと思うが。

目の前の美人さんを一通り観察した俺は、周囲の把握に移る。

木造のログハウスみたいな小屋のようだ。

近くに暖炉があって、パチパチと心地よい音を立てながら炎が踊っている。

調度品はあまり置いていないようだ。

目に入るのは簡素な椅子と机のみで、大量の書籍か資料らしき紙片が纏められていた。

床は……

よくわからん模様が一面に描かれている。

複雑怪奇な模様は、俺の足元…いや、ミミックの俺に足なんて無いけど比喩表現的な意味で…と、目の前の娘の立つ足元を中心に広がっているような気がする。

だから何だと言われたらそれだけだが。

ふむ、考察の結果を纏めるとだ。

…何この状況？

「…そんな……………」

突然娘が独り言を呟いた。

なんね？

「失敗…？詠唱を間違えた？陣に狂いがあつた？…………いや、詠唱は完璧だったし、陣の狂い程度ではそこまで影響は出ないはず…」

無視すんなや。

「…へ？」

ん？

「箱が喋った？…ふう、疲れが溜まってきたかな。」

ただの箱じゃないぞー

状況がわからないなりに触手をフリフリして自己アピール。

「また?...え、本当に喋って...?」

え?聞こえてんの?

「聞こえてるって...聞こえてる、けど。」

ヒャッホイ!

「!?!」

ようやく話が通じる相手を見つけたようだ。

相変わらず俺こと箱からは一切音が出ていないことから念話とかそんな感じだと思われるが、そんなの関係ねえ!今度は意識して言葉を送ってみる。

- どーも、ニミツクです。よろしく -

「!?!...あ、えっとナスターシャ・セインです。よろしくお願いします?」

- はいよろしく。んで?現状を説明してくれると助かるんだけどな? -

「あ、はい!わかりました!」

そして、長い長い説明が始まった。

／／／／

「え、つまり話をまとめると……すごい強いモンスターが君と親しい村のそばに住み着いて？」

村人が束になってもかなわないし、君にも倒せない、外部の助けも期待できず、最終手段として強そうな何かを召喚しようとしたら箱がでてきてまあびっくり。これがホントのビックリ箱……ってごめんごめん、そんなに睨まんという……」

「私にとっては生死を賭けた真面目な話なんです。」

「うん……俺はミミックにしてはそこそこ強い方だと自負しているが、俺では力になれんかね？」

一応、協力を申し出るがナスターシャは申し訳なさそうに笑った。

「貴方の気持ちはありがたいですが……ミミックといえばランクDのモンスター。残念ながら奴にはとても……」

「そうかい。ってかDランクなのか、俺。ちなみに敵さんはどんな感じなのさ？」

「……Aランクの強敵です。」

俺より3個も上のランクかよ。……そもそもランクって何さ？
よし、聞いてみよ。

「あ、ランクっていうのは冒険者ギルドが発表しているモンスターの強さ、厄介さの格付けです。……奴、ホワイト・レックスドラゴンは上から2番目のAランクに当たります。」

あれ？

・待て待て、ホワイト・レックスドラゴンって言ったか？・

「……ええ、白い鱗を纏ったドラゴンです。レックスドラゴンは純粋なドラゴンにこそ劣りますが、それでも竜の眷族。……生半可な相手では無いですから。」

あの白蛇がそんなに高い位なのか。

・それなら力になれると思うんだが……・

「え？いや、無理していただかなくても……」

・無理……いや、召喚される前の俺の主食ってホワイト・レックスドラゴンだったんだけど・

「は？」

・うん。・

「え？ミミックですよね？」

・そうだぞ。正確にはミミックロードだけど・

「だって、まさか……」

- とりあえず連れて行ってくれないか？別に君にも損は無いだろ？ -

「それは…そうですが。」

戸惑った顔で認める彼女。

- はい決定。それじゃあ運搬頼む。 -

「わ、わかりまし…運搬？」

…未だに足は遅いんだよなあ。

出会い（後書き）

「…そういえば貴方もミミック、モンスターでしたね。」

「？今さら？」

「いえ、普通に会話していたけどよく考えたら凄い事なんじゃないかと。」

「そこはほら、君が召喚したからとか？」

「普通のミミックにはそもそも会話が成立するほどの知能はありませんよ……」

契約（前書き）

何とか都合がついたため投稿します。
多少不自然な所があっても笑って許して下さいな。

契約

- いー天気だね。 -

「…そ、そうだな。」

- 俺さ、今までずっと真っ暗な中にいたから青空が嬉しいんだよなあ。 -

「…なる…ほど……」

- ん、どしたの？息上がってるよ？ -

疲れた様子の同行者、いや、新しく出来たばかりの相棒を気づかう俺。

「…だ、誰の…せいだと…思ってるんだッ…！」

誰のせい？それはまあ…

- 俺のせいだろ。 -

まあ確かに体力自慢なわけでもない女性がデカイ木箱をしょって森の中を歩けば息も上がるってもんだろうな。

- てかナーシャちゃん、確かに敬語も畏^{かしこ}まつた態度もいらな^いとは言っただけさあ？なんか順応早くないか？ -

「貴方が……良いと言っただろう…？」

「うん、だからそうなんだけどな？なんかこう……なんて言うんだろなあ？」

「……ただでさえ……息が、切れているのに……適当な会話……を……振るなあ！」

「はっはっは。頑張れー。」

明るい日の光が差し込む昼間の森、その中を大きめな木箱を背負って歩く女性がいた。木漏れ日を照り返す見事な銀の髪を持つ麗人だが、服装は簡素なものであり背中の木箱もあり立派とは言い難い。何より、このような森の奥を若い女性が一人歩いている事が不自然だった。

何故このような事態が起こっているのか。

話は数時間前に遡る。

／／／／

俺が運搬を頼んだ娘は、しばらく何か考えていたようだが再び、今度は酷く緊張した様子で話しかけてきた。

「あ、あの……少し私の話を聞いて貰います。」

「どうぞどうぞ。」

俺も久しぶりに人と話せて嬉しいことだし。

「え、あっさり承諾された？……とにかく、貴方は私が召喚の儀式を行い魔界から呼び出しました。」

「うん。そうみたいだな。」

魔界：魔界、ねえ？あの真つ暗な石造りの空間ってそんなに大層な場所だったんだな。

「私が行った儀式、召喚魔法の儀式はこの数百年使われたことのない伝説的な召喚魔法で、そのあまりの危険性に超一級禁魔法の筆頭に指定されている魔法です。」

「ほうほう。何で禁術指定なのさ？」

「…単純に危険過ぎるからです。もともとこの魔法は、人間にはどうしようも無い事態が起こった時に魔界から強力な魔獣を呼び出してその力を借りるというものでした。しかし、人間の手に負えない事態に対して低級な魔獣を呼び出した所でなんの意味もありません。そこでこの魔法は、魔界にあっても非常に強大な存在の魔獣を選んで呼び出す魔法として編み出されました。普通の召喚魔法との一番の違いですね。そしてそれほどの魔獣を呼び出すのであれば、呼び出した魔獣の暴走だけは何としても防がなければなりません。……そのためこれから行う召喚魔法の儀式の第二段階が作り出されました。」

「ふうーん。あれ？でも俺ミミックだぞ？」

「それなんですが…私も動揺して尋ねていませんでした。…貴方のレベルを聞かせて頂いても？」

- 71だが。これって高いのか？ -

低いってことは…無いよな？

「…なるほど。レベル70以上の魔獣はこの世界では《魔王》クラスと呼称されます。先程のランクS〜Eは魔獣ごとの種としての平均値、クラスというのは個体ごとの力に対しての俗称です。モンスターというのもレベル20以上の魔獣の俗称だったりするんですが…わたしが使った召喚魔法はもともとのものを独自に改造して召喚するレベル帯を下げた代わりに必要な魔力を少くしたもののなんです。現れる魔獣は大体65〜75くらいのレベルの魔獣を考えていたんですが、成功したようですね。」

- そのようだな。んで？第二段階ってのは？ -

「…はい。第二段階では、呼び出した魔獣と直接交渉します。もともと数人で行う魔法なので、全員の全ての魔力と引き換えに一つ言うことを聞かせる魔法なんですが…この魔法は私が一人で行えるように改造したオリジナルです。いくら何でも一人でそれほどの魔力を提供する事は出来ませんから…そのかわりを私の全てであてます。」

- ？と、いうと…？ -

「今の貴方は召喚魔法に縛られてその陣から出られないはずですよ。…私の願いである「村を守る」ことを約束して頂ければ、すぐに

陣はその効力を失います。私の肉体は食べて頂いても結構ですし、魂も好きにして頂いて構いません。魔力も残り少ないながら貴方に捧げられますし、現時点で私の所有する物の所有権も貴方に移ります。これで不満があれば応相談といったところですか」

凄じい覚悟だな、おい。しかし…何でまたそこまで他人の為にやれるのかねえ？

- あー、なんだ。その村には家族でもいるのか？ -

彼女は俺の質問に大きく目を見開いたが、すぐに微笑を浮かべた。終わりを待つ者の清廉な笑み。俺が微妙な態度で尋ねようとしたことを、彼女はすぐに察したようだ。

「…あの村に家族はありません。いえ、そもそも私には家族と呼べるような者がいたことはないのですが。私はかつて宮廷魔法使いなどをやっていましたね、当時の私は宮廷内の権力闘争やら陰湿な権謀術数やらに疲れきっていました。…だから、逃げたんですよ。逃げて逃げて…たどり着いたのがあの村でした。あの素朴で暖かい村の人々は私の心を救ってくれたんです。……今度は私の番だ。」

そこまでを一気に話したナスターシャは、そこでふと俺のほうを見つめた。

「貴方は不思議な魔獣ですね。…人に対して敵対的ではなく、その心に興味を持ったりする。」

「そんな貴方だから正直に話せば、私とて命は惜しい。私は命をな

げうつて英雄になりたいわけでも人々の為に笑って犠牲になれる聖人なわけでもありませんよ。」

なにやら決意を秘めた目をしたナスターシャ。だが、同時に僅かな緊張と怯えも見て取れる。……あれ？俺なんか悪役っぽくないか？

別に女一人くらい食べたって何にも変わらないし、魔力も有り余ってるんだけど……

いや、でもくれるというなら貰っておこう。食べたりはしないけどね。

- ……いいだろう。契約は成立した。その村を守って見せようじゃないか -

俺がそう言う（念じる）と、足元の陣がふっと効力を失ったのを感じた。なる程、なくなって初めてわかったが確かに陣は俺を縛っていたようだ。

「……ありがとうございます。では、私が村までお運びします。後は……お好きにしてください。」

…何だろう、ホントに何だろう。なんかこう…悪代官にでもなった気分なんだが。私を好きにする代わりに村の年貢を軽くして下さい、みたいな？

まあアホな事考えてないで交渉の続きといこうか。

- あー、待つて待つて。契約は、俺がその村を守る代わりに君は全てを捧げる、だったよな？ -

「…はい。何かご不満が？」

- いや、不満とかじゃなくて…君の全てって事は生かしておいて働いて貰ってもいいわけだ？ -

その言葉に彼女は初めて嫌悪感の滲む視線を俺に向けた。

あれ？なんか変な事言ったか俺？ただの確認のつもりだったんだがな。

「…構いませんが、男性、取り分け魔獣を悦ばせる術には自信があります。」

- いやいや違うから。下方面の話じゃないよ。 -

「それでは私を生かして何を？」

- 運搬を頼むと言ったろう。…俺は世界を見て回りたい。だが、ミックだからな、ともに移動が出来ないんだ。よって君には俺を背負って旅をしてもらいたい。 -

そう、それが俺の密かな夢だった。せつかくの転生、せつかくの新世界、見て回れないのが悔しかったのだ。自分のいた世界とは全く異なる異世界に来た以上、旅をして回ってみたいと思うだろう？

「…その…ような事で？」

- うん。頼む。 -

「本当に…？」

「それがこつちの要求だ。ってか敬語もいいよ。……それとも、それだけは嫌な事情とかあるのか？」

まだ呆けたような顔をしていたナスターシャは、俺の質問に我に返ったようにぶんぶんと首を横に振った。

「いえ！いえ、そんな事はありません。…実は、私も世界を旅してみたいと思っていたので……」

「そうか、それは良かった。んじゃあ、ホワイト・レッサードラゴン退治とこれからの旅の相棒として、よろしく。」

「こ、こちらこそ。改めて、ナスターシャ・セイン、ハリエルフで、以前はこの国の城で宮廷魔法使いをしていました。…どうぞ、よろしく」

「…やっぱ敬語は止めてくれよ。何か堅苦しくて嫌だ。」

「しかし…」

「敬語禁止」

「わかり…わかった。それじゃあ、ホワイト・レッサードラゴンの所へ向かおう。」

「何か久しぶりに食べる気がするな。楽しみだ。」

こうして、俺とナスターシャ・セインの奇妙な二人(?)の旅が始ま

ったのだった。

／／／／

ナスターシャがへばってしばらく。現在の彼女は軽い足取りで森を
抜けようとしていた。

- 何だよ。元気じゃないか？ -

「背中が重りが無くなったからな。…自分の重さを消す魔法がある
なら最初から使ってくれないか？」

- いや、忘れてたわ。 -

「……………」

ナスターシャは黙り込んでしまった。そう怒るなって。

- あ、そろそろ森も終わりみたいだぞ？ -

だんだん木がまばらになり始め、空が良く見えるように……

- おいおい… ナーシャちゃんよ、昼間っからキャンプファイヤーは
やらないよな普通。 -

ナスターシャが村のある方だと言っていた方角の空は、黒い煙が立

ち上っていた。どう見てもちょっとした小火という規模じゃない。

村の壊滅という規模だ。

「……そんな……」

背中越しに、悲鳴のような声が聞こえた。意識をナスターシャに向けると蒼白な顔で食い入るように煙を見つめている。

「……だって、あの竜はまだ村を襲ったりしないってギルドは……」

「おい、大丈夫か？」

「私は……なんのために……？」

不味い、パニックを起こしかけてるな。……まあ、よりどころを一気に村ごと失ったなんて発狂しても可笑しくない事態だろう。

……失ってそこまでショックを受ける程のものがあつて羨ましい、というのはこの場に相応しく無い感情なんだろうな。

まあ、今はとにかく状況の把握と背中 of 相棒を落ち着かせることか。

これからの面倒と彼女の悲哀を思った俺は、一人万感のため息をついたのであった。

そりゃー、確かに暇なのは嫌だが……こんなにてんこ盛りのハプニングを押し付けられてもそれはそれでお腹一杯なんだがなあ。

撃退

村は、白き竜に蹂躪されていた。

炎を上げて焼け落ちる家々に、逃げ惑う村民。

勇敢にも竜に立ち向かい、倒れた村の男達の亡骸が哀れを誘う。

誰もが必死だった。

竜は、この世界において最強の魔獣である。

その存在は天災に等しく、出会ったならば逃げるしかない。

正確に言えば村を襲っている竜は亜竜であり、本物の竜とは大きな差があるのだが、ただの村民にそのような事がわかるはずもない。
レスサードラゴン ドラゴン

もっとも、わかった所で村民達がすべき事は変わらないのだが。

亜竜は、竜にこそ劣るものの地方の村を壊滅させるくらいの事は簡単にやってのける。

亜竜の中でも特に強力な個体は、一頭で城塞都市を落とすことさえあるのだから。

ギヤオオオオオオッーーーー！！

竜の発する大音響が辺りの空間をビリビリと震わせる。

もはや自分に刃向かう者が消えた事を悟った竜は、満足げに村を徘徊し始めた。

少年は、かろうじて残った家の残骸に隠れていた。

隣には母もいるし、まだ幼い妹もいる。彼は、幼い妹を守るために家の残骸の陰となる狭い空間の入り口に立っているのだった。

少年とてまだたった10歳の子供ではあったが、自分達を逃がすために村の男達と竜に挑んで行った父親の背中を見ていた。

父親が戻って来るまで自分が母と妹を守るつもりだった。

憔悴した様子の母と泣き疲れた妹は、この小さな隠れ家でぐったりとしている。

少年は、母の元へ近付くと励ましの声を掛けた。

「母様、きっと大丈夫。父様も死なないって約束してくれたし、僕もリエラ（妹）も母様自身も生きてるんだから。」

「…そうね。ありがとうツール。お父さんが帰ってくるまでみんなで頑張りましょうね。」

そう言って微笑み、少年ツールを抱き締める母。

「うん、母様。…そうだ、それにナスターシャ姉様がいるよ！」

自らの発見に興奮したように話すトール。

「…そう、そうよね。ナスターシャ様がいたわ。あの方なら何か出来るかもしれないわね。」

「うん！ナスターシャ姉様なら助けてくれるよ！ナスターシャ姉様はとっても強いから！」

「…ふふ、トールはナスターシャ様が大好きなのね？」

こんな状況ではあったが、息子の嬉しそうな様子に微笑む母。実際、トールはナスターシャが大好きだった。

四年程前にフラフラの状態で村に迷い込んだナスターシャは、村長に保護されてすぐに村に馴染んでいった。自分の過去を話しながら、ないために少し謎めいている所もあるが、彼女の面倒見がよい性格に子供達はすぐになついてしまった。以来子供達には頼れる良き姉として、大人達にはその驚くような深い知識と魔法の腕で頼りにされ、今ではすっかり村の大切な一員である。

1ヶ月前、村の近くに竜が住み着くとナスターシャは森に消えた。

自分に出来ることをするとトールに言い残して。

「…うん。ナスターシャ姉様は好きだよ。優しいし、色々教えてくれるから。」

はにかんだ様子で母に語るトール。10歳の少年の素直な心だ。

「そう、お母さんは良いことだと思うわ。」

暗い一時的な隠れ家に、初めて穏やかな空気が流れる。

「ねえ、母様…」

トールが口を開き……

唐突に日が差した。

トールの目の前に自らの影が黒々と落ちる。

母は、目を見開いて彼の背後を見つめていた。

トールがゆっくりと振り向くと、そこには白い竜鱗の巨体があった。

すぐ先に、粘着質な竜の唾液がポトポトと落ちる。

…ああ、死ぬんだな…

ただ、そう思った。

竜が身体をたわめ、口をガパリと開き……

どこから飛んできた炎の塊に横っ面をぶん殴られた。

ギヤオオオアッー！？

初めて聞く竜の動揺したような鳴き声。

グ、グギヤオオオオオオオオオッー！！！！

そして、本気で激怒した鳴き声。

だが、彼はもう竜を恐れてはいなかった。

視線の先で風に揺れる美しい銀色。

何故か、大きな箱を背負ってはいたが……

「母様、もう大丈夫。…ナスターシャ姉様が来たよ。」

彼女は、息子のツールほど現実を甘く見てはいなかった。

（いくらナスターシャ様でも一人で竜と戦えるはずがない。……でも、今の私に出来る事もない。それならせめてナスターシャ様の応援をしよう。私達を助けてくれるように。）

その願いは…叶う。

／／／／／

今にも子供を襲おうとしているホワイト・レッサードラゴンを発見した俺は、まずは挨拶代わりに《フレイム・キャノン》をぶっ放した。フフフフ、ナスターシャも驚いてるようだな。やべっ、結構楽しい。

「…おい、今のはなんだ？」

- ん？フレイム・キャノン炎属性魔術だが。 -

「魔術を使えるのか？」

- うん。…でも、魔界で使うより威力が下がった気がするな。 -

鈍ったかな？

「…いや、魔術というのは原始的な技術だからな、周辺の魔力によって威力のブレが激しい。その分、完全に制御された魔法より感覚的に使えるし高い時の威力も上なんだが…それに、私が召喚して契約していることで貴方自身の力も多少落ちているんだ。」

ふん。そういうものなのか。

つと、どうやら敵さんがお怒りのようだ。

「すまない、えっと……」

- ああ、悪いね。俺には今の所名前が無いんだ。……ん、せっかくだからナーシャちゃんにつけてもらうか。俺の名前何がいいと思う？ -

「今はそんな話を話している場合ではないと思うが……ッ！……こっちに来るぞ！」

- 全く……落ち着いて名前くらい考えさせろよ。 -

- 《グラビティ・ネスト》 -

ギャオオオアアッー！？

こつちに飛びかかろうとしたホワイト・レッサードラゴンに闇属性魔術を発動した。

足元に発生した重力場に足を取られてたたらを踏むドラゴン。

…やっぱりしょぼいな、あいつ。

「…確かに負ける気がしないな。貴方と会うまでは全くまともな抵抗すら出来る気がしなかったのにな……」

- まあ、俺だって本物の竜には勝てないよ。でも、ドラゴンとレックスードラゴンには圧倒的な差があるからな。-

さて、せっかくだからさっさと終わらせるか。

- 《フレイム・キャノン》 -
- 《フレイム・キャノン》 -
- 《フレイム・キャノン》 -
- 《フレイム・キャノン》 -
- 《フレイム・キャノン》 -

「……なんだかあの竜が可哀想になってきたな。」

ホワイト・レッサードラゴンはボロボロになって地面に転がっていた。

まあ、当然だろう。《フレイム・キャノン》の5連射で元気だった俺がビビる。

- さて、ナーシャちゃんや。俺をあの竜に投げつけてくれ。-

「え？あ、ああ、わかった。」

背中俺を降ろし、振りかぶるナスターシャ。

現在ミミックは重さゼロ

こうして俺は、ホワイト・レッサードラゴンを美味しく頂いたのだ
った。

……ま、味なんてわからんけどね。

撃退（後書き）

以上で宝箱転生記本編を終了します。

少々強引な終わり方で申し訳ないのですが…

この後一話だけエピソードを投稿して完結です。

この作品はあくまで習作なため、続いて正式な作品を新たに書き始める予定です。

次回作品も人外転生モノにする予定ですが、転生先を募集します。

…と、どうか知恵を貸して下さい。

今の所、

再びミミック（続編ではない）

意外に少ない鎧系（ド クエのさまよう鎧とか）

ゴーストとか、霊体系（精霊とかもアリかも）

と、いった所を考えていますが……

協力いただける方は、作者インテグラルへのメッセージか宝箱転生記の感想欄へ清き一票を！……ではなく、ご意見をよろしく願います。

本作を気に入ってくれていた皆様、次作は本作での実験、経験をもとにより読みやすいようにしていくつもりですので、これからインテグラルをよろしく願います。

エピソード

- なあ、ナーシャちゃんよ？本当にいいのか？ -

「いいんだ。…確かに少し惜しい気もするけど、私は私の道を行くさ。」

- ひゅーひゅー！かつこいいー！ -

「…茶化さないでくれないか？」

- いや、ナーシャちゃんってからかいやすいんだよね。 -

俺がホワイト・レッサードラゴンを美味しく頂いた後。

ナスターシャは村人達を集め、癒やし、村の復興に取りかかった。

彼女からは村の復興にある程度目処が着くまで留まりたいとの要望があつたため、村には3ヶ月ほど逗留した。

生き残った村の男達に混じって触手で資材を運んでいたらいつの間にか村の中にすっかり馴染んでしまい、ナスターシャに背負われていないと子供達が寄ってくる。

ミミックたる俺を恐れる村民は皆無だった。

ナスターシャ様が連れて来たなら大丈夫だそうだ。

……もはや信仰レベルじゃないか？

まあいい、とにかくそんな俺の協力もあつて村の復興は順調に進んだ。

破壊されていない家が数軒残っていたことと、村はずれに固まっていた畑や農地は無事であった事があり、時間はかかるが元の生活を取り戻せるだろう。

村に新しい家が五軒建った日の深夜、ナスターシャは俺を背負って村を出た。

もう村は大丈夫、次は貴方との約束を果たす番だと笑う彼女に村に逗留する時間の延長を提案したが、受け入れなかった。

おそらく、彼女なりのけじめをつけたのだと思っている。

現在俺はナスターシャの背に揺られて夜空の下を進んでいる。

背中越しの彼女の足取りに迷いは無い。

- ……またいつか、顔をだそうな？ -

なんだかんだいって俺自身もあの村を気に入ってしまった。

「そうだな。またいつか、だ。」

- ああ、またいつかな。 -

そこでふと足を止めたナスターシャは、振り返ると少ししんみりした空気を吹き飛ばすように笑顔を浮かべた。

「さあ、まずはどこに向かおうか？」

いつの間にか昇り始めた太陽が、村から上がる炊事の煙を浮かび上がらせる。

かつての黒煙とは真逆の、再生を表す煙だった。

F i n

エピローグ（後書き）

皆さんの意見の多さから、次作もミミックになりそうです。ご意見、ご感想等まだまだ受け付けておりますのでよろしく願います。

最終話は頑張っていた話風にしてみたんですが……疲れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9359z/>

（習作） 宝箱転生記～ミミックの生態～

2012年1月8日23時03分発行